CHIYODA Creative ART Lab for Children
千代田クリエイティブ・アートラボ

金田　卓也　教授
（家政学部　児童学科）

昨年度から地域連携プロジェクトの一環として継続している千代田クリエイティブ・アートラボはスタッフの大学院生と学部生の協力のもとに近隣の幼稚園・保育園・小学校の子どもたちのこんなものを作りたい、こんなものがあったら楽しいといったアイデアを具体的に実現できる場を提供しています。スタッフである大人と関わりながら子どもたちの自由な発想と想像力をさまざまな素材を通して目に見える形にしていきます。参加している子どもたちにとって大学に来るということ自体がとても貴重な体験になっています。小学校においては先生と子どもたちは教える・教えられるという関係ですが、ここでは、経験を積んだ大人であっても友だちに近いより対等な関係で接しており、その関係性が活動の中で自由な発想を生み出す素地になっているように思われます。

今年の活動でも自由な発想に基づくいろいろな作品が創り出されましたが、子どもたちの持っている潜在的なクリエイティブな力というものに驚かされます。その中からアートラボの特徴がよく反映された２つの作品を紹介しておきます。

＜パネルシアターを用いたストーリーメーキング＞

昨年から継続してストーリーメーキングに取り組んでいます。蛍光絵の具で彩色した不織布で切り絵を作り、出きた絵人形をパネル板に貼ったり、配置を変えたり組み合わせたりして，パネルシアターを用いてストーリーを生み出していきます。今年度は、子どもが生み出したストーリーを子ども自身が一場面ごとに撮影し、パソコンで文字を書き入れていくという絵本作りを行いました。

この小学生の女の子の作った絵本もそうですが、子どもたちはストーリーメーキングがとても好きです。そのプロセスを見ていると、言葉で話すという言語的イメージと絵本の絵に表われたビジュアルなイメージというものが相互に関わりながらストーリーそれ自体がより豊かになっていることがわかります。千代田クリエイティブ・アートラボでは、大人であるスタッフが子どもたちの語るストーリーの展開に注意深く耳を傾け、ときには質問しながら、子どもたちのストーリーが新たな展開を生み出すことができるような環境作りに心掛けています。







＜色の図鑑　イロペディア＞

保育者や小学校教員を目指す児童学専攻の学生が造形指導に関する授業で試験的に作った色水が大学の造形表現室に残っていたところ、クリエイティブ・アートラボにやって来た 5 歳児、小学 1 年生、小学 6 年生の子どもたちがその残された色水に興味を持ち、自分たちでも色水作りを始めました。大学生の活動が子どもたちの活動につながり、幼児と小学生といった異年齢の子どもたちが一緒になって新たな活動に発展させていくということもこのアートラボの特色といえるでしょう。

6 年生の男の子は作り出した微妙に異なる色に名前を付けていくことがたいへん面白くなり、＜色の図鑑　イロペディア＞を作成するということになりました。彼は 1 日だけではなく、しばらくの間この活動を続け、土曜日にやって来たときなど午前中から午後まで 5 時間余り、色の図鑑作りに没頭しました。最近の子どもたちの生活を見てみると、保育園・幼稚園・小学校の生活だけではなく、習い事なども多く、好きなことに集中するという時間を確保するのがなかなかむずかしいようです。クリエイティブなことをするためには、十分な時間をかけて自分の世界～マイワールド～に入るということが欠かせないように思います。このクリエイティブ・アートラボではそうした時間を子どもたちに提供できるようにしています。

最終的にはオリジナルの色に名前をつけて色図鑑を作る活動の中で 100 色が図鑑に収録されました。たとえば、「カメムシの目玉いろ」や「微生物のため息いろ」「後悔の電磁波色」といったとてもユニークな色名も見られました。















